「いっつもそうや！」

「みんなに考えてほしいことがある。」と言つて、先生が本田さんの作文を紹介しました。

本田優

私が人権を考えるとき、まず一番最初に頭に浮かぶのは、両親のことです。私の父と母は、身体障害者です。けれど、私にとっては、他のみんなの親と同じように大切な家族です。私は父や母の障害のことについては小学校六年生のときまであまり意識していませんでした。父や母ができないことは、私や妹がすることが当たり前だったし、家族は助け合っていくものだと思っていました。それに、私の周りには、親や兄弟に障害を持った人がいるという人が多かったので、みんなそれなりに障害者に対しての理解があったんだと思います。

じゃあ、なぜ六年生になって急に両親の障害のことが気になりだしたのか、その理由の一つにあげられるのは、環境の変化だと思います。私は六年生のときに転校しました。もちろん周りに知っている人などいませんでした。とても不安でした。「私はみんなからどう思われているんだろう、」「友だちはできるんだろうか。」と、そのころの私はいろんなことに敏感になっていました。

そんなとき、クラスの中でこんな会話を聞きました。

「おまえきもちわるい。しんしょうみたいや。」「何で。しんしょう、もっときもちわるいわ。」私はこの会話を聞いたとき、「しんしょう」とは、だれのことを言っているのかわかりませんでした。けれど、この会話をしていた二人の様子や、周りの人が笑っていたのを見て、「しんしょう」といわれる人たちのことをバカにしているんだなあということだけは分かりました。

私が、「しんしょう」とは身体障害者のことを言っているのだと知ったのは、六年の社会の授業中のことでした。ものすごく腹が立ちました。「みんながバカにしていたのは、身体障害者のことなんだ。私のお父さんとお母さんがバカにされたんだ。」そう思い、次第に悲しくなってきました。けれど、そのときは何も言うことができませんでした。あのとき、私は自分の立場のことしか考えていませんでした。「私は今、いろいろ大変なんだ。親が障害をもっているなんて言ったら、きっとバカにされる。」そう思っていました。その思いがあまり変わることなく私は中学生になりました。

中学に入ると小学校よりも、障害者をバカにする言葉を聞くようになりました。授業中でも休み時間でも、いつもそういう話ばかりしています。だれも注意はしません。今思えば、私はなんで言えなかったんだろうと後悔しています。差別を黙って見ていたり、それに対して何も言わないということは、そのことを認めていることと同じだと思います。

差別をされている人やその家族はつらく、悲しい思いをします。差別をしている人は心が枯れていきます。もっと物事をよく考えて、たくさんの経験をして一人ひとりが差別をなくそうと本当に思ってくれることを願います。

本田さんの作文を聞いて、みんなが感想を出し合いました。

○私は、本田さんの両親が身体障害者だということは前から知っていたし、私のじいちゃんも身体障害者だから、言ったら「バカにされるかもしれん」という気持ちは分かる。でも、うまく言葉で言えない。（由佳）

○優ちゃんの作文を聞いて、何ともいえない気持ちになった。作文に書いてあったような、気持ち悪いと思うような気持ちがあるのは確かだったし、スーパーとかで見ても目で追ったりしていた。でも、本当にその人の立場で考えたらいやだったと思う。私は手話を覚えたいなとかとか思っているけれど、それもただの興味だけだし、その人たちにとっては私はむかつくやろうなと思った。（飛鳥）

○初めて知ったのでとてもびっくりした。中一のとき「しんしょう」のことを「よごれ」と呼ぶことを、ほかの中学校の先輩に教えてもらったことがある。その時、ひどいなあとひとり言にしか思わなかった自分はだめだと思う。もっと自分を変えていかなきゃいけないと思う。（理香）

○そんなに悩むことはないよ。自分が悩んでいるから、よけいに差別されるのだ。（一博）

先生は一博君の感想が気になりました。そこでみんなの感想をプリントして、一博君の感想を板書しました。もう一度みんなで考えようと言うと、一博君はあわてて「おかしかったと思う。」と言いました。

すると本田さんが目をうるませて猛烈に抗議しはじめました。

「一博はいつつもそうや！分かったようなことを言う。」

「いっつもそうや！」（中学校向け）

A　教材設定の意図

「差別はしてはいけないこと」ということを毎日聞かされたとしても、それでは人権学習の意図は達成されない。差別の問題は観念でとらえても生きたものにならないのである。人権学習が生きたものとして身に付くためには、差別を観念で教えるのではなく、差別される側の視点から考えさせなければならない。具体的な事実の中で、具体的な生活の中で感性を通してわかることで初めて、差別に対する憎しみや怒りがわいてくる。

差別語の問題はその典型である。言ってはいけない言葉、使ってはいけない言葉を羅列することは、興味本意に終わってしまう。なぜその言葉を使ってはならないのかを。その言葉の持つ歴史性や、果たしてきた役割などを通じて伝えることが大切だが、それでも十分な手応えはなかなか得られない。やはり、そこに、その言葉によって心を傷つけられた人の思いを伝えたい。そうすることで、その言葉の持つ差別性を実感の伴ったものにしたい。

また言葉というものは、いったん口から出てしまうと。それを聞いた人たちに一定の影響を与えるということも教えたい。ある状況の中で使われたことによって差別性を持った言葉は、違う状況下でも聞く人によってはその差別性は消えないということである。

本教材では子どもたちが持っている差別観の一例として「身障」という言葉をとりあげている。文中にあるとおり「身障」とは「身体障害者」をさす言葉ではあるが、単なる略語ではなく、知的障害者も含めて障害者をバカにしたり、差別する思いを込めて使われる言葉である。言葉の中には、縮めて使うことで差別性が増す言葉も多い。（例・・・「精薄」「特学」等）。

使ってはいけない言葉の一つとして覚えるのではなく、言われた当事者の思いを通して自分の問題として考える姿勢を養いたい。

B　教材の解説

本教材に使われている本田優さんの作文は、人権教育講話の後、自分や自分の家族・親戚・友だちなど、身近な人のことを書こうという中から出てきたものである。このクラスには、ほかにも在日朝鮮人の生徒Y君がおり、こうしたマイノリティを生きる生徒の思いと、ほかの生徒たちの思いをつないで、それぞれが豊かに生きていく力をつけることを願って、二人の作文を使った授業が行われた。

授業後に感想を書かせたところ、Y君に対しては、国籍の違いを単なる違いにとどめず、重いものとして初めて受け止めた生徒もいた。また本田さんに対しても。教材の中にあるような自分の問題としてとらえ返している生徒もいた。

しかし、その一方で、「初めて知った。でもそんなこと関係なく、これからも変わらずに友だちでいよう」という感想が二人に対して共通してあった。

本田さんはそうした「うん大丈夫や」という言葉に対して、「そんなに簡単に言わんといてや。本当に考えてくれとるのかと言いたくなる」と返している。このやりとりが話をさらに深めていくきっかけになる。最初の感想が思いの足らないものであっても、それに基づいた話し合いでそれぞれが深められることを大切にしたい。

一博君の感想は本田さんを激怒させた。というより、「もう一度考えよう」と取り上げられたとき、簡単に言いつくろおうとする態度が許せなかったと言える。責められているのは最初の感想ではなく、深く考えようとしない態度だった。

深く考えれば、自分の持っている差別意識に行き着く。それを明らかにすることはつらいことである。しかしそのことを通してしか、差別する側から、共に差別と闘う側への転換はないのである。

C　指導上の留意点

①「使ってはいけない言葉」という側面が強調されすぎて、いわゆる「言葉狩り」を生まないよう十分教材設定の意図をくみ取ってほしい。

②書かせた感想などはそれで終わりにするのではなく、本教材で展開されたように、さらに深めるきっかけにしたい。

D　参考資料

・「思いをめぐらし友とつながろう」
中村秀人（鶴来町立北辰中学校）
二〇〇〇年度石川県教研人権教育分科会基調報告

・挿し絵　川皇　敏憲（辰口町立中央小学校）

E　授業の展開例

教師の基本発問・助言	生徒の活動・指導の要領
1　導入 ①人をバカにしたり、差別したりするときに使われる「言葉」の問題について考えましょう。	①例としていくつかの言葉が出てくれば板書する。なぜ問題なのかは、後で考えようと投げかけておく。
2　展開 ②教材文を読む。 ③本田さんが、なぜこんなに一博君に対して怒ったかを考えよう。 ・本田さんが両親のことを差別されたと感じたのは、どんなときか。 ・「しんしょう」と言うことばはどうして本田さんを傷つけたのだろうか。 ・両親や障害者が目の前で差別されたとき、本田さんはなぜ何も言えなかったのだろう。 ・一博さんの感想が、ほかの人たちと違うところはどこだろうか。 ・本田さんは一博君の何が許せなかったのだろう。 ・本田さんが怒ったときの気持ちを別の言葉で表現してみよう。	③課題を提起しておき、少しずつ本田さんの気持ちを追っていく。 ・「しんしょう」が身体障害者のことを差別する言葉だと知ったときであることを押さえる。 ・「しんしょう」という言葉が、相手をバカにしたりするときに使われる言葉であることを考えさせる。 ・文面では「親が障害を持っているなんて言ったら、きっとバカにされる」と自分自身の差別性を言っているが、「差別」とは、何も言えないほどつらく悲しい気持ちにさせられることであることも押さえ、いじめ等でつらい立場に立たされたことのある生徒の思いと共感させたい。 ・ほかの人たちが本田さんの作文を、自分の問題としてとらえ返しているのに対し、一博さんは差別される側に問題があるといっている。 ・感想そのものよりも、言いつくろって簡単にすませ、自分を深めようとする態度がみられなかったことが許せなかったととらえさせたい。 ・これまでに差別されても何も言えなかったのが、これほどまでに抗議したときの本田さんの気持ちになって、何人かの生徒に自分の言葉で表現させたい。
3　まとめ ④今日の勉強で、思い当たることがあったら出し合おう。	④「しんしょう」等差別的な言葉を使ったときのこと、差別を見過ごしてすまったときのことなど、自分たちの経験を話し合わせたり、書かせたりしたい。